

その時である。はるか末席から内記が、

「恐れながらお答え申しあげたく存じまする」

と別当に伺いをたてた。別当はほっとして、

「直答申しあげよ」

「はっ」

内記は進み出て一礼すると、

「肖柏 は、嘉吉 三年

(一四四三) 中院通淳の子

として生まれ、生来旅を好み、各地

を歴訪し、応仁の乱後に、摂津の

池田に隠栖し、永正十五年

(一五一八)和泉の堺に転居致

し、そこで没しております。

彼は連歌師にて「水無瀬三吟」

「湯山三吟」は、宗祇、肖柏、宗長

の作品と伝えられております。ま

た、和歌は飛鳥井榮雅に学び「牡

丹花千首」三巻「肖柏集」が残つ

ておりまする」

とよどみなく、すらすらと答える

と、頼重が、名を尋ねた。

「玉尾内記にござりまする」

別当が答えると、

「大西丹後殿の弟子であったな」

頼重は、内記の噂をすでに聞き

及んでいるようであった。

この話を伝え聞いて、松太夫の

一族は内記の学才が藩主の御前で

披露できたと、手ばなしで喜んだ

が、松太夫は苦りきって、

「いらざるさし出口を叩いて」

と内記をたしなめた。苦勞人の

松太夫には内記の恐れを知らぬ若

さが危ぶまれてならなかった。

「内記をおだててはならぬぞ、われ

ら一族の噂が高まれば、人々の

羨望がいつ敵視に変わるやも知れぬ、

気をつけてくれい」

松太夫は一族の者を集めてそう

注意した。この危惧は後日、事実と

なって現われるのである。

寛文六年(一六六六)一月

元旦、粉雪のちらつく、丸亀港に

流人を乗せた一隻の船がついた。

一行を出迎えた、日蓮宗の団扇

太鼓の群集は一万余と伝えられ

ている。

流人は、上総興津妙覚寺の

第二十四代貫主、日堯上人と、武州

雑司谷法明寺住職、日了上人で、

両上人は、日蓮宗の一派である

不受不施派に属し、幕府よりくださ

れる寺領は、

「仏法にいう、四恩の中の国主の仁

恩に属するもので、宗教的意味の

ないものである」

として、寺領の受書の手形を拒絶

し、「上意違背の罪により、終世

配流」

を命ぜられたのである。

両上人は、丸亀城内の一陋屋

に幽閉されたが、丸亀藩の冷遇ぶり

は言語に絶し、外側はいかめしく、

青竹矢来を張りめぐらしたが、内部

は風が吹きぬけ、粉雪が上人の

枕辺に舞いこむありさまであった。

この冷遇ぶりが信者の同情を呼び、両上人も、この法難に法悦を

さえ憶えて屈しなかったため、その

高德を慕って、全国各地から、

「金毘羅詣り」

「四国遍路」

にことよせて、両上人の姿を

拝まんとして集いよる信者の数は、

日ましにふえたのである。とくに、

日堯上人は備前の生れであった

から、下津井から丸亀まで、毎日船

で通う信者も多かった。

丸亀と金毘羅はへだたること僅

か三里（一二キロ）である。丸亀に

おける両上人の噂はその日のう

ちに金毘羅でも噂になった。

両上人配流のため、讃岐に

不受不施派の信者が、急激にふえ

たので、危機を感じた高松藩では、

その対策の一つとして、金光院別当

宥栄を退け、伴宥栄に法灯をつが

せて、宗教活動をより活発にせよ

と命じた。

宥栄は就任に際して、

「われ浅学非才にもかかわらず、

山下の血脈により、金光院別当

就任の榮に浴したのは、昨今、讃岐

が騒がしくなったためである。即

ち丸亀に、日堯、日了の両僧が

配流された。彼らの属する、日蓮宗

の一派である、不受不施派は、国主

の恩をおろそかにし、人心をまどわ

す邪宗である。がその信者は、己れ

らの信ずるところを信じない者は

謗法者で、その謗法者を看過すと

同罪であるとして、あらゆる手段を

用いて、目下他宗の者を折伏しつ

つある。国禁の邪宗に、讃岐を席巻

させてはならぬ、これより朝夕二回、

国家安穩、五穀成就、万民安泰の

祈禱をなし、更に日々法話、勤行を

行い、布教に力を入れ、讃岐一円

は申すに及ばず、日本国中の民衆

を、わが金毘羅大権現の信徒と致

せ」

と檄をとばした。

松太夫は気心の知れた宥栄が、

隠居を命ぜられたことが残念でな

らなかつた。

社人たちも、寺僧びいきの宥栄が

別当となつたので、将来に不安を

「信仰は、各人の心まかせでよい

のではないか、他宗を排斥したり、

誹謗すればその報いを受けねばな

らぬ」

と、宥栄のやり方を批判する社人

もあつた。

松太夫は、

「宗教は、分り易く教えを説き、

かつ悩み苦しむ民衆を救済する

ことだ、これからの余生を、民衆

の心のよりどころとなれる、

金毘羅作りに賭けたい。皆も力を

かけて欲しい」

と一族の者たちに話をする、

三右衛門は木の扱いに慣れていた

ので、三尺（約一一四 糎）

の大木札を作り、能書家の内記に

「海路安全」「大漁祈願」など雄渾

な字を書かせ、護摩を焚いて祈願し、

「大漁祈願」はこれを授ける社人の頭を、

「コッソ！」

と叩いて、

「大当り！」

と叫ぶ、奇想天外な守札の授け方を考案した。この守札は人々の口から口へと伝わって、

「金毘羅さんの三尺護摩札！」

「金光院小僧の頭叩き！」

と人気を拍した。

「海路安全」

は船が難破したとき、この三尺

の守札にすがって、命拾いをした

漁師達が、次次お札の絵馬を奉納に

きて、

「三尺護摩札は命札にもなる」

と話をしたので、漁師達が争って

買い求め、三右衛門は守札作りが

間にあわぬと、悲鳴をあげるありさま

までであった。

こうして、松太夫の悲願である、

民衆に親しまれる金毘羅さんに、

一歩、一歩近づいていった。

権太夫は、社人になってから、

一年の大半を旅に出て、神仏

両道を修め、更に方位や、星の

信仰にもとづく卜占、加持祈祷の

術を修めていたので、祈祷を始め

た。

元来、讃岐は弘法大師の影響か、

真言宗の信者が多く、昔ながらの

民間信仰を根深く信じており、病氣

になると、三宝荒神や雨垂荒神のた

たりと思ひ込み、魔よけの祈祷を頼

んでくる。

権太夫は、こうした病人に、祈祷

のあと、祖谷から取りよせた薬草を

煎じて与えた。

胃病には、雨子の煎汁、腹下しに

は鮎のうるかを、体の弱者には、

まむし酒を与えると、その効果がい

ちじるしく、権太夫の祈祷は霊感あ

らたかと人気を呼び、修験者たちの

祈祷がさっぱり流行なくなった。

内記の学問所の人気、三右衛門の

守札の人気に加えて、権太夫の加持

祈祷と、松太夫一族に、一度に花が

咲いたように、幸運が訪れた。

ところが、権太夫に加持祈祷の

客をさらわれた修験者たちは、

「社人権太夫儀、権現社に奉仕する

際の勤めむき面白からず、とくに

服忌令に反することおびただし、

嚴重なる処罰ありたし」

と表役所に訴え出たのである。

権太夫は、犬を愛し、犬と寝食を

共にしていたので、別当は、

「社人は、みそぎをし、身を潔めて

神に奉仕する身でありながら、家畜

と寝食を共にするとは不心得な

り、当分の間、謹慎を命ずる」

旨を松太夫に伝えた。

しかし、参詣人は相変ず権太夫

の祈祷を求めて列をなすので、

権太夫に代って、一族の者が加持

祈祷をし、薬を与えていると、

修験者や表役人が、解散せよと追

い払った。

「病やむ身みを、やつのことことで、ここまで辿たどりつついたのじじゃ、追おい払はらわれてたまるものか」

群衆ぐんしゅうは、追おわれると退散たいさんするが、

暫しばらくすると、また集あつまつてくる。

表役人おもてやくにんはついに柵さくを設もつけて、

竹槍たけやりを持もち群衆ぐんしゅうを追おい払はらうので、

事情じじょうを知らぬ一般いっぽんの参詣人さんけいにんは、

信仰しんこうの場ばで表役人おもてやくにんが群衆ぐんしゅうを追おう

光景こうけいに驚おどろき、噂うわさとななった。

(以上10月22日放送分)